

政治空間よりみた後漢の外戚輔政

――後漢皇帝支配体制の限界をめぐって――

はじめに

武帝（在位…前一四一―前八七）以降の前漢の皇帝たちは、「内朝官」（皇帝の生活空間たる禁中に宿衛する側近官集団）を中心に統治し、その結果、外戚が「内朝官」を掌握して専権を振るうようになった。これをうけて後漢の皇帝たちは、武帝期以降の側近政治を克服して自らの支配体制を強化するために、禁中（後漢では洛陽城の宮城の一つである南宮の一角にあった建物群）に宿衛する側近官を規模と機能の両面において縮小再編成した。そして、禁中の外（具体的には官衙や会議場）を主たる執務場所とする官に、従来は「内朝官」の管掌していた政策形成（政策案の作成・審議・決裁および政策の実施）と文書伝達（上奏文ならびに詔の伝達）を移管した。具体的には、三公・將軍・九卿などに政策形成を、尚書台などに文書伝達を分掌させて、それらの官を中心に皇帝による統治を輔

渡邊 将智

翼させたのである。ただし、緊急時などには、前殿（宮城にある宮殿で、皇帝の主たる執務場所）・禁中への出入を許された大夫・議郎・侍中、および禁中での宿衛を許された宦官専任の中常侍が、三公・尚書台などに代わって、政策形成と文書伝達をそれぞれ臨時的に管掌する場合があった。このような禁中の外に重心を置く政治制度は、外戚の竇氏一族が誅滅された和帝期（八八―一〇五）頃までに基本的に形成され、実際に和帝は当該の政治制度に基づいて統治していた。^①

ところが、後漢では他ならぬ和帝期以降に外戚の専権がさらに甚だしくなり、宦官による国政への関与もまた強まった。^{②③} その結果、後漢の皇帝支配体制は著しく弱体化した。先述した政治制度の改編は、皇帝支配体制の強化という点において、一時的には効果を上げることができたものの、長期的には必ずしも十分には効力を発揮できなかったといえよう。しかれば、右の政治制度は、その形成当初からすでに重大な矛盾を抱えていたことになる。

それでは何故、後漢では、武帝期以降の政治制度を大きく改編し

たにも関わらず、皇帝支配体制が弱体化したのであろうか。その背景の一端は、政治空間の問題に注目することによって明らかにできるのではなからうか。そもそも皇帝と諸官の「政治的な距離」は、皇帝の執務場所・生活空間と諸官の執務場所の「空間的な距離」に投影されていた。⁽⁴⁾ この「空間的な距離」を政治制度の改編によって大きく変化した結果、後漢の政治制度が形成されたとみられる。しかば、皇帝と諸官の「空間的な距離」は、政治制度が改編された和帝期以降に再び変化したのではあるまいか。もし、そうであるならば、後漢の皇帝支配体制の弱体化を招いた制度的な問題は、皇帝と諸官の「政治的な距離」が再度変化していく過程を政治空間の面からたどることによって明らかにできるであろう。さらに、この検討を通じて、後漢の皇帝支配体制の限界を浮き彫りにすることができるかもしれない。

以上のような観点に基づき、本稿では、後漢の皇帝支配体制の弱体化を招いた制度的な問題について、政治空間の面に特に重点を置いて明らかにしたいと思う。

一 外戚と「輔政」

「はじめに」に掲げた問題を説明するためには、何を手がかりとして検討を進めるべきであろうか。ここで注目されるのが、『後漢

書』卷六三季固列伝である。⁽⁵⁾

(梁) 商、后の父を以て輔政し、而して柔和にして自守するも、整裁する所有る能わず、災異、數々見われ、下の權、日々重し。これによれば、順帝期(一二五―一四四)の大將軍梁商は、皇后の父としての立場をもって「輔政」していたという。後漢において「輔政」を委ねられたことが史書中に確認できる者は、三公任官者などの他、外戚・内戚(皇帝の父系親族)・「尚公主者」(皇帝の娘や姉妹を娶った者)など皇帝の親族が多い。それら「輔政」を委ねられた親族を一覧にすると、表1のようになる。

この「輔政」とは、卷三四梁統列伝附梁松列伝に

光武、崩するや、遺詔を受けて輔政す。

とあるように、しばしば先代の皇帝の遺詔に基づいて、有力な臣下に委ねられた。ただし、卷二明帝紀・即位年条所載の明帝(在位二五七―七五)の詔に

夫れ萬乗は至重にして壯者は慮輕、實に有德に頼みて小子を左

表1 皇帝親族中の輔政者

皇帝		立場		本官
明帝	梁松	尚公主者	内戚	虎賁中郎將→太僕
和帝	劉蒼	内戚	外戚	驃騎將軍
殇帝・安帝	竇憲	外戚	外戚	侍中→車騎將軍→大將軍
順帝	鄧騭	外戚	外戚	車騎將軍→大將軍
桓帝	梁商	外戚	外戚	大將軍
靈帝	梁冀	外戚	外戚	大將軍
少帝	何進	外戚	外戚	大將軍

右せしめんとす。高密侯（鄧）禹は、元功の首なり。東平王（劉）蒼は、寛博にして謀有り。竝びに以て六尺の託を受くべきも、大節に臨みて撓れず。其れ禹を以て太傅と爲し、蒼を驃騎將軍と爲せ。

とある通り、新帝が即位後に詔を下して「輔政」を委ねる場合もあった。

かかる「輔政」の内容を検討するにあたって注目されるのが、前漢の武帝の崩御に際して遺詔を受けた霍光・金日磾・上官桀の事例である。『漢書』卷六八金日磾伝に

上の病むに及び、霍光に屬して以て少主を輔けしめんとす。光、（金）日磾に讓る。日磾、曰く、「臣は外國人なれば、且に匈奴をして漢を輕んぜしめんとす」と。是に於いて遂に光の副と爲す。……輔政すること歳餘にして、病みて困しむ。

とあるように、霍光らは武帝から、「少主」こと昭帝（在位…前八七～前七四）による統治を輔佐するよう委嘱され、そのことを同伝では「輔政」と記している。ただし、右の記事に関連する『漢書』卷六六車千秋伝に

後に歳餘にして、武帝、疾み、皇子たる鉤弋夫人の男を立てて太子と爲し、大將軍霍光・車騎將軍金日磾・御史大夫桑弘羊及び丞相（車）千秋を拜す。竝びに遺詔を受けて、少主を輔道す。武帝、崩じ、昭帝、初めて即位するも、未だ聽政に任えず、政事、壹に大將軍光に決す。

とあるごとく、霍光や車千秋は遺詔を受けた後に昭帝を「輔道（輔導）」し、さらに霍光は指導力の不十分な昭帝に代わって国政を総覧した。これを一見すると、「輔政」と「輔道」は内容の同じものであったかのごとくである。しかしながら、『漢書』卷六八霍光伝には、昭帝崩御後に帝位を継承した昌邑王劉賀（在位…前七四）が素行の不良を理由に廃位された時のこととして、次のようにある。

（上官）太后、詔して（劉）賀を昌邑に歸し、湯沐邑二千戸を賜う。昌邑の羣臣、輔導の誼を亡い、王を惡に陥れることに坐す。（霍）光、悉く二百餘人を誅殺す。

劉賀に従って長安に滞在していた昌邑王国の家臣たちは、「輔導の誼」を失って劉賀の素行を悪化させたとして罪に問われている。これを逆説的にいうと、右の霍光伝に見える「輔導の誼」とは、君主を善良に教え導く役割、ということになる。

このように、「輔導」が皇帝に教育を施す役割であるのに対して、「輔政」は皇帝による統治を輔佐する役割であり、両者は内容の異なるものであった。それらの事柄を踏まえて『統漢書』百官志一を見ると

太傅、上公一人。本注に曰く、善を以て導くを掌り、常職無し。とあり、太傅の職掌はまさしく皇帝を「輔導」することであった。それに対して、「輔政」を本来的に担っていた官は三公である。なんとすれば、『統漢書』百官志一に

太尉、公一人。本注に曰く、……國に過事有らば、則ち二公と

通じて之を諫争す。

とあるごとく、皇帝による統治に過失が生じた場合、太尉は「三公」すなわち司徒・司空とともに、皇帝に諫言することを職掌としていたからである。実際、卷七六循吏列伝によれば、桓帝期の太尉劉矩は司徒种嵩・司空黄瓊とともに「輔政」していた。これら三公が政策案の作成と審議を中心的に担当していたことからすると、「輔政」とは、政策案の作成・審議、つまり政策の立案を担当する官の任官者に、主として委ねられたものではあるまいか（以下、「輔政」を委ねられた者を「輔政者」と、「輔導」を委ねられた者を「輔導者」と称する）。

そこで、再び表1を見ると、皇帝の親族の多くが將軍を本官として「輔政」を担っていたことに気づく。後漢の將軍は、三公と同じく、政策案の作成と審議に中心的に参加していた。三公・將軍と九卿は、審議を行う場合に、宮城の外にある自分の官衙から朝堂（洛陽城の南宮の南宮前殿に隣接）や百官朝会殿（南宮の東門の外にある司徒府に付設）に行き、それらを会議場として主に使用していた。⁽⁷⁾時代はやや遡るが、前漢成帝期（前三三―前七）に輔政者となった外戚の大將軍王鳳は、『漢書』卷九八元后伝において、次のように述べている。

輔政して出入すること七年、國家、臣（王）鳳に委任し、言う所は輒ち聽され、士を薦むれば常に用いらるるも、一功善無く、陰陽、調わずして、災異、數々見る。咎は臣鳳の職を奉じて状

無きに在り。

王鳳は、「國家」すなわち帝室から国政を委任されると、皇帝に進言したり人材を推薦した。彼の本官が將軍であったことからすると、ここでの進言は政策を立案する一環としてなされたものとなろう。しかれば、輔政者は政策の立案を担当することによってはじめて、「輔政」の任を果たし得たことになる。

大庭脩氏は、前漢においては、新帝の即位後に不測の事態に備えて、外戚を將軍に任命して兵権を委ねることが通例であったとする⁽⁹⁾。また、武帝期以降の將軍が国政運営において果たした役割について、佐藤直人氏は、皇帝と対立する丞相などを抑制・排除するなどして皇帝権力を維持していた、としている⁽¹⁰⁾。このように、前漢の將軍は皇帝による統治を輔佐する官とされ、その任官者としては外戚が最も適任とみなされていた。後漢の皇帝は、そうした前漢の認識を基本的に受け継ぎ、外戚などの親族を輔政者とする際には、彼らを政策の立案を担当する官のなかでも特に將軍に任命したのであろう。右の『漢書』元后伝に見えるごとく、王鳳の意見が皇帝にことごとく採用されていたことからすると、両漢代の皇帝は輔政者の意見を最大限尊重し、それに基本的に従って統治していた、といえるのである。

以上のような輔政者としての外戚は、皇帝との政治的な距離の最も近い立場にあったといえる。すると、外戚は「輔政」するにあたって、皇帝と空間的に最も近い場所で執務していたことになる

う。表1から明らかであるように、後漢の外戚は、竇憲の一族が誅滅されて政治制度が改編された和帝期以降も、それ以前と同じく「輔政」していた。これより、それら両時期における外戚の執務場所は、政治制度の改編にも関わらず、まったく変化しなかった可能性を想定することもできるが、そのようにみなすことは果たして可能なのであるか。また、もし仮に変化が見られないとするならば、そのことは政治制度の改編以後に外戚が引き続き「輔政」したことと如何に関わるのであろうか。

これらの問題を説明するためには、皇帝と諸官の空間的な距離について、外戚の領袖ならびにその一族の就任官に注目して分析する必要がある。そこで、以下では、和帝期以前とそれ以降の外戚が、それぞれ洛陽城のどこで執務していたのかを比較・検討し、「はじめに」に掲げた問題を説明したいと思う。

二 内戚輔政から外戚輔政へ

(一) 内戚輔政の挫折

後漢の外戚は、そもそも如何なる背景のもとで「輔政」を委ねられるようになったのだろうか。初代皇帝の光武帝（在位…二五～五七）は外戚を国政に参与させなかったことで知られ、その跡を継いだ明帝（顕宗）もまた、光武帝の政治方針を基本的に継承して、外戚の国政への関与を抑制した^①。むしろ、明帝期においては、内戚

を国政に積極的に参与させていたようである。

前掲明帝紀・即位年条所載の明帝の詔によると、明帝は即位直後、後漢建国の功臣たる鄧禹を太傅に任命して「輔導」させるとともに、異母弟の東平王劉蒼を驃騎將軍に任命した。そして、卷四〇班彪列伝附班固列伝上に

永平の初め、東平王（劉）蒼、至戚を以て驃騎將軍と爲りて輔政し、東閣を開きて、英雄を延く。

とあるごとく、劉蒼に「輔導」を委ねた。このように、明帝は建国の功臣を輔導者とするのみならず、内戚の有力者に政策の立案を担当させて輔政者とし、彼らの輔佐を受けて統治しようとした。

さらに、明帝は劉蒼以外の諸侯王も国政に参与させていた。例えば、卷一四宗室四王三侯列伝に

顯宗、（劉）興を器重して、異政有るごとに、輒ち乘驛もて焉に問う。

とあり、明帝は従来とは異なる方針に基づいて政治を行おうとする場合に、北海王劉興のもとに使者を派遣し、おそらくはその実施の可否について意見を求めた^②。劉興は光武帝の長兄たる劉縯の子で、光武帝期には諸侯王の身分にありながら特別に守縦氏令・弘農太守を歴任して善政を布いていた。そこで、明帝は諸侯王の有力者たる劉興に諮問し、その意見を自らの意思決定の参考としていたのである。このように、明帝期の諸侯王は諮問という限られた形ではあるが、政策案の審議に参加していた。

以上に述べた通り、光武帝の外戚抑制策を継承した明帝は、劉蒼に輔政者の地位を与えて政策を立案させるとともに、その他の諸侯王の有力者も、臨時的にはあるが、政策案の審議に参加させた。こうして、漢王朝の皇帝支配体制は、皇帝が内戚の有力者に「輔政」を委ね、その輔佐を受けて統治する形に、基本的に確立するはずであった。ところが、卷四二光武十王列伝によると、劉蒼は、前漢建国以来、内戚が国政に参与した前例の無いことを理由に、驃騎將軍の印綬を返上して就国することを願ひ出た。明帝は許可を与えず、引き続き「輔政」を委ねようとしたが、劉蒼がなおも請願したため、洪々ながら就国を認めざるを得なかった。

さらに、この当時に存命であった明帝・劉蒼の七人の兄弟のうち、楚王劉英・濟南王劉康・淮陽王劉延は図讖を作成して明帝を呪詛するなどしたために、また広陵王劉荆は帝位の篡奪を目的として挙兵を企てたために、いずれも処罰された。⁽¹³⁾このように内戚の有力者が相次いで罪に問われる状況のもとで、彼らのなかから劉蒼に代わる新たな輔政者を選ぶことは不可能であったといえよう。かくして、明帝の目指した内戚輔政は、劉蒼が国政への参与を拒否し、かつ劉英ら内戚の多くが処罰を受けたことにより、あえなく挫折したのであった。

(二) 外戚輔政の萌芽

明帝の跡を一九歳で継いだ章帝（肅宗。在位：七五～八八）は、

即位直後、卷三章帝紀・即位年条所載の詔に

行太尉事・節鄉侯（趙）熹は、三世、位に在りて、國の元老たり。司空（牟）融は職を典ること六年、勤勞にして怠らず。其れ熹を以て太傅と爲し、融を太尉と爲し、竝びに尚書の事を録⁺べよ。

とあるように、太傅趙熹と太尉牟融に「尚書の事を録」べさせた。先述のように、太傅は「輔導」を、三公は「輔政」をそれぞれ担う官であった。また、「尚書の事を録ぶ」とは、官僚機構の統率と国政の総覧を許可されたことを示す慣用的な表現¹⁴で、それを付与された者は、国政の主導者（官僚機構を統率して国政を総覧する者）として位置づけられた。¹⁵とすれば、趙熹と牟融は「尚書の事を録」べることによって、単なる輔導者や輔政者としてのみならず、国政の主導者として明確に位置づけられたことになる。

ところで、卷二三竇融列伝附竇憲列伝によると、章帝は、即位の翌々年にあたる建初二年（七七）に竇氏を皇后に冊立し、それにもなつて皇后の兄である竇憲を侍中に、その弟である竇篤を黃門侍郎に任命した。黃門侍郎は禁中を執務場所とする官で、省闔（禁中の門）において、尚書台と文書を授受していた。¹⁶また、侍中は皇帝に口頭で進言することを許された官で、和帝の永元四年（九二）までは禁中に宿衛していた。¹⁶章帝は、竇憲に「輔政」を委ねはしなかったものの、禁中において口頭で進言することを許可し、その輔佐を受けて統治しようとしたのである。

では、何故に章帝は、外戚の竇憲に輔政者の地位を与えなかったのであろうか。その手がかりを探るために、当時の人々が外戚による国政への参与をどのように認識していたのかについて確認していきたい。巻一〇皇后紀上によると、章帝の意向を汲んだ官吏が外戚の馬氏一族を封侯するよう求めた時、馬太后（明帝の皇后）は外戚の封侯を光武帝・明帝の外戚抑制策に違うものとみなし、馬氏の封侯に強く反対した。また、巻四一第五倫列伝によれば、第五倫は、陰皇后（光武帝の皇后）が外戚の陰氏を国政に参与させなかったこと、ならびに明帝が外戚の梁氏・竇氏の不正を厳しく罰したことを引き合いに出して、章帝の寵愛を受ける馬氏一族の勢力を抑制するよう求めた。

このように、章帝の講じた外戚優遇措置は、光武帝・明帝の遺志に反するものとして、第五倫ら官吏のみならず、外戚出身の皇太后にも広く認識されていた。しからば、この当時、竇氏をはじめとする外戚に輔政者の地位を与えることは、光武帝以来の国是に反する行為とみなされたであろう。ゆえに章帝は、竇憲に「輔政」を委ねることができず、彼を侍中に任命するに止めざるを得なかったのである。

章和二年（八八）、章帝が崩御すると、その跡を継いだ和帝は幼少であつたため、竇太后（章帝の皇后）が臨朝称制して、これを後見することになった。それに先立ち、章帝は遺詔を下している。その詔文は残されていないが、竇憲列伝に

和帝、即位するや、（竇）太后、臨朝す。（竇）憲、侍中を以て、内に機密を幹し、出でては命を宣誥す。肅宗、遺詔し、（竇）篤を以て虎賁中郎將と爲し、篤の弟たる（竇）景・（竇）瓌、並びに中常侍たり。是に於いて兄弟、皆な親要の地に在り。

とあることから、章帝の遺詔には、竇憲の弟の竇篤を虎賁中郎將に、竇景・竇瓌を中常侍に、それぞれ任官させるよう記されていたことが分かる。彼らの本官のうち特に注目すべきは、中常侍であろう。中常侍は、禁中での宿衛ならびに皇帝への口頭での進言を許された官で、永元四年までは士人・宦官がともに任官することができた¹⁷。かかる中常侍に竇氏一族を新たに任用するよう、章帝が遺詔を下した点に留意しておきたい。

また、巻四和帝紀・即位年条所載の竇太后の詔には、次のようにある。

今、皇帝、幼年を以て、瑱瑳として疚に在り、朕、且に聽政を佐助せんとす。……侍中（竇）憲は、朕の元兄なり。行能、兼備して、忠孝、尤も篤く、先帝の器とする所なり。遺詔を親受すれば、當に舊典を以て斯の職を輔くべし。

竇太后は、章帝の遺詔を受けた竇憲について、侍中の官をもって自分を輔佐すべき者とみなしている。和帝の後見人たる竇太后を輔佐するということは、つまりは和帝を輔佐することに他ならず、したがって章帝の遺詔には、竇憲を侍中に留任させるとともに、彼に和帝を輔佐させるよう記されていたとみられる。『後漢紀』巻一二章

帝紀下・章和二年条には、章帝崩御後の侍中竇憲について

（竇）憲は性、褊急にして、數々自ら困しむ。輔政の後、遂に威福を作し、睚眦の怨、報ぜざる無し。

とあり、彼は「輔政」して権勢を振るっていたという。この記事の内容を勘案すると、章帝の遺詔は、竇憲に「輔政」を委ねるよう記されていたことになる。

以上のように、章帝は臨終に際して遺詔を下し、竇憲を侍中に留任させるとともに、彼に輔政者の地位を与えた。さらに、竇氏一族の有力者を中常侍に任命して、禁中において口頭で進言する役割を彼らに独占的に委ね、和帝による統治を輔佐させた。章帝は、在世中には光武帝以来の国是に阻まれて外戚を輔政者とし得なかったが、自ら遺詔を下すことによって、外戚による「輔政」を正当化しようとしたのである。

三 後漢洛陽城と外戚政權

（一）洛陽城と竇氏政權

前節で取り上げた章帝の遺詔に基づき、和帝期には竇憲が輔政者となった。それでは、竇憲を領袖とする竇氏一族はどの官に任官し、洛陽城のどこで、如何なる形で国政に関与していたのだろうか。

章帝の遺詔を受けた竇憲は、和帝即位後も引き続き侍中に在官した。しかし、竇憲列伝に見えるように、都郷侯劉暢が竇太后の寵愛

を受けるようになると、竇憲は「宮省」つまり禁中における自分の勢力が劉暢に脅かされることを恐れ、彼を殺害した¹⁸。竇憲は激怒した竇太后により幽閉されたが、まもなく謝罪の証として北匈奴を討伐することを願い出て許され、車騎將軍に任官して出征した。

北匈奴に大勝した竇憲は、その軍功をもって大將軍に昇進し、それによって政策の立案を担当するようになった。これと同時に、虎賁中郎將竇篤は九卿の一つである衛尉に、中常侍竇景・竇瓌は侍中に、それぞれ転任した。まもなく、竇景は執金吾に、竇瓌は光祿勳に昇進したが、それ以降も侍中には、竇憲の娘婿たる郭举が任官していた。ここでは、竇氏一族が相次いで侍中に任官していた点に留意しておきたい。

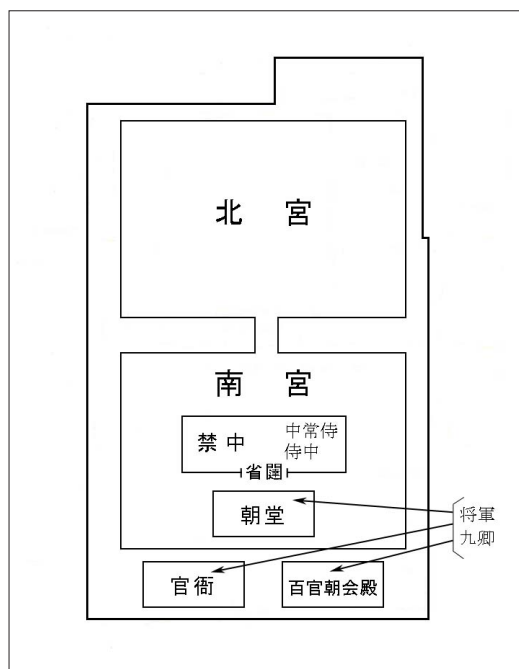
右の分析結果を踏まえて竇憲ならびにその一族の就任官を整理すると、次のようになる。

①官衙（禁中の外）を主たる執務場所とし、かつ朝堂・百官朝会殿を会議場として使用する官「將軍・九卿」

②禁中に宿衛して、皇帝に口頭で進言することを許された官「侍中・中常侍」

竇氏政權では、その領袖が①の將軍に、その他の一族が①の九卿ならびに②の諸官に任官していた。皇帝は禁中において政務を執る場合があり、そこで竇氏は、②に任官することにより、禁中において、皇帝の意思決定に影響を及ぼすことが可能であった（以下、皇帝が禁中において下す意思決定を「意思決定」と称する）。竇憲が

図1 洛陽城の都城と竇氏の就任官（概念図）



劉暢を排除した事件は、彼が禁中という場所と「意思決定」への影響力の行使を特に重要視していたことを、端的に示すものといえよう。

以上の状況を当時の洛陽城の平面図に表せば、図1の通りである。この平面図は、王仲殊氏作成の平面図「東漢雒陽城平面図」を基礎として、そこに先述の私見を加えて作成した概念図である。⁽¹⁹⁾ そのため、図1に示した宮城・禁中・官衙などの位置や範囲は、実際とは必ずしも一致しない部分もあるかもしれない。しかし、この概念図としての平面図からは、竇氏が禁中を中心に国政に関与していた様子を見て取ることができる。

（二）「改編」以後の洛陽城と外戚政権

〔I〕竇氏誅滅と「改編」

永元四年、和帝は中常侍鄭衆ら宦官の協力を得て、皇帝弑殺を企てた郭挙らを誅殺し、さらに竇憲や竇篤を免官して自殺に追い込んだ。この事件によって和帝は、先述の①・②に任官した外戚が「輔政」の任を果たさずに、かえって皇帝支配体制を脅かす存在になり得るという事実と直面し、彼らを抑制するための方策を講じる必要に迫られた。そこで和帝は、禁中における外戚の勢力を弱めるために、②の中常侍を宦官専任の官とし、さらに侍中が禁中に宿衛することを禁じて、そこへの出入のみを許したのである（以下、このような和帝期における侍中・中常侍の改編を特に「改編」と呼ぶことにする）。⁽²⁰⁾ 和帝期以降、③の侍中の官衙は南宮にあったが、それは「改編」にともなって設けられたものであろう。

以上の「改編」により、先述の①・②の諸官は次のごとくに再編成された。

- ①官衙（禁中の外）を主たる執務場所とし、かつ朝堂・百官朝会殿を会議場として使用する官「將軍・九卿」
 - ②禁中に宿衛して、皇帝に口頭で進言することを許された官「中常侍」
 - ③通常は官衙（禁中の外）を主たる執務場所とし、皇帝に口頭で進言する場合にのみ禁中に入出した官「侍中」
- それでは、「改編」以後、外戚は右の①～③を含むどの官に任官

し、洛陽城のどこで国政に関与していたのであろうか。表1に示したように、「改編」以後も外戚の領袖が相次いで輔政者となったが、ここでは「輔政」した期間の比較的長い、殤帝・安帝期の鄧鸞の一族ならびに順帝・桓帝期の梁商・梁冀の一族を「改編」以後の代表的な事例として取り上げることにはしたい。

〔Ⅱ〕鄧氏政権

元興元年（一〇五）一二月、殤帝（在位：一〇五―一〇六）が和帝の跡を継いで即位すると、鄧太后（和帝の皇后）が臨朝し、その兄で鄧氏の領袖たる鄧鸞は虎賁中郎将から車騎將軍に昇進して国政に関与するようになった。これにともなうて、鄧鸞の弟である鄧弘・鄧闓は、いずれも黄門侍郎から侍中に転任した。殤帝が即位後数ヶ月で崩御すると、鄧鸞は鄧太后とともに安帝（在位：一〇六―一二五）を擁立する。この頃、侍中には鄧鸞の子たる鄧鳳が任官していた。

和帝崩御後、鄧鸞とその兄弟は、卷一六鄧禹列伝附鄧鸞列伝に

和帝、崩じてより後、（鄧）鸞の兄弟、常に禁中に居る。鸞、謙遜して久しく内に在るを欲せず、連りに第に還らんことを求む。歳餘にして、（鄧）太后、乃ち之を許す。

とあるように、鄧太后の許可が下りるまで禁中に滞在していた。『後漢紀』卷一五殤帝紀・延平元年秋七月条に、殤帝の崩御と安帝の即位について記した後には

延平の初めより、鄧鸞兄弟、常に禁中に在り。是に至りて乃ち第に就く。

とあるのによれば、鄧鸞らが禁中から退出して自分の邸宅に帰ったのは延平元年（＝安帝の即位年。一〇六）七月のことであるから、彼らは半年以上、禁中に滞在していたことになる。

鄧氏と禁中の関係は、卷五安帝紀・即位年条からもうかがい知ることができる。

（延平元年）八月、殤帝、崩ず。（鄧）太后、兄の車騎將軍鄧鸞と與に策を禁中に定む。其の夜、鸞をして持節せしめ、王の青蓋車を以て（安）帝を迎え、殿中に齎す。

これによれば、延平元年（ここでは八月のこととしている）、殤帝が崩御すると、鄧鸞は鄧太后とともに、禁中において、清河王劉慶の子である劉祐（後の安帝）を皇帝位に即けるための策命を作成した。⁽²²⁾ 先述したように、この当時の將軍・侍中は禁中の外を主たる職務場所としていたので、鄧鸞兄弟はそれらの官に基づいて禁中に滞在していたわけではなかったようである。

『後漢紀』卷一四和帝紀下・元興元年条に、和帝崩御後、鄧鸞の虎賁中郎将在官時のこととして

（鄧）太后、乃ち兄等を引きて策を禁中に定め、（劉）隆を立てて皇太子と爲す。是の日、皇帝位に即き、太后、朝を攝る。

とあるように、鄧太后は車騎將軍昇進以前に鄧鸞を禁中に召し出して、ともに劉隆（後の殤帝）を擁立した。また、右の鄧鸞列伝によ

れば、鄧騭らは禁中から自分の邸宅に帰ることを幾度となく求めたものの、鄧太后の許しが出るまでは、禁中に滞在することを余儀なくされていた。これらの事柄からすると、鄧騭らの禁中滞在は鄧太后の許可によるものであって、やはり將軍をはじめとする諸官に本来的に認められていたものではなかったことになる。

そのことを踏まえた上で右の諸史料を整理すれば、次のようになる。すなわち、鄧騭兄弟は、和帝崩御後に何らかの理由をもって、鄧太后から特別に禁中に召し出され、殤帝の擁立に関与した。彼らは車騎將軍や侍中に転任した後も、鄧太后の強い意向により、そのまま禁中に滞在し続けて、殤帝崩御後には安帝の擁立に関わった。と。殤帝期に鄧騭が輔政者として国政に関与していたことからすると、鄧太后が鄧騭らに禁中での滞在を許可した目的は、鄧騭が「意思決定」に影響を及ぼすことを可能にして、「輔政」の任を十分に果たさせることにあった、といえるのである。

それでは、鄧騭兄弟の禁中での長期滞在は、如何なる背景により許されたのであろうか。鄧騭列伝によれば、安帝の永初二年（一〇八）、鄧騭は車騎將軍として羌人の反乱討伐に出征し、大敗を喫した。それにも関わらず、彼は鄧太后の一族であることを背景に大將軍に昇進している。このようにして、鄧太后が鄧騭を優遇していたことからすると、鄧騭兄弟による禁中滞在中もまた、彼らが鄧太后の一族、言い換えれば外戚であることを背景に許可されたもの、ということになる。

〔Ⅲ〕 梁氏政權

安帝が鄧氏を誅滅した後には、外戚の耿氏・閭氏が相次いで専權を振るった。その閭氏を宦官の協力のもと打倒して帝位に即いたのが、順帝である。順帝は、陽嘉四年（一三五）に梁皇后の父たる執金吾梁商を大將軍に昇進させて輔政者の地位を与え、さらに梁商の子である梁冀・梁不疑を侍中に任命した。その後、梁冀は執金吾などを歴任して河南尹に転任したが、梁不疑は永和六年（一四一）の梁商の死去まで侍中に在官している。このように、梁商期の梁氏政權は、一族の有力者を長期間にわたって侍中に任官させていた点に大きな特色を認めることができる。

梁商が死去すると、順帝は梁冀を大將軍に昇進させ、さらに輔政者の地位を与えた。先述したように、皇帝が外戚に「輔政」を委ねる行為は、章帝の遺詔によつてすでに正当化が図られていた。順帝が輔政者の地位を梁商から梁冀に事実上、世襲させたことによつて、外戚による「輔政」の正当性があらためて確認されたといえよう。

梁冀の大將軍就任にともない、梁不疑が梁冀の後任として河南尹となったが、それ以降、梁氏の一族が侍中に任官したことを示す直接的な記事は見えなくなる。ただし、卷三四梁統列伝附梁冀列伝には、桓帝期の梁冀について、次のようにある。

宮衛・近侍、並びに親しむ所を樹て、禁省に起居して、纖微、必ず知る。

この記事には、梁冀が皇帝に「近侍」する官に自分の与党を任官させていたと記されており、それに基づく、梁不疑の転任後も梁氏一族が侍中に引き続き任官していた可能性を想定することができる。やがて、順帝・冲帝（在位…一四四～一四五）・質帝（在位…一四五～一四六）が相次いで崩御し、桓帝（在位…一四六～一六七）が即位すると、梁不疑は河南尹から九卿の一つである光禄勳に転任し、さらに一族の梁淑が衛尉に任官した。このように、梁冀期においては梁氏一族が九卿・侍中に多く任官していた。

さて、右の梁冀列伝によると、梁冀は少なくとも桓帝期には「禁省」すなわち禁中において生活していた。⁽²³⁾ それに先立ち梁冀は、卷六質帝紀・即位年条に

冲帝の崩ずるに及び、（梁）皇太后、（梁）冀と與に策を禁中に定む。

とあるように、冲帝崩御後、梁太后（順帝の皇后）とともに、禁中において冲帝の継嗣を定め、質帝を擁立している。さらに、質帝が崩御すると、卷七桓帝紀・即位年条に

會々質帝、崩じ、（梁）太后、遂に兄の大將軍（梁）冀と與に策を禁中に定む。

とある通り、梁冀は再び禁中において質帝の継嗣を定め、桓帝を擁立した。先述したように、鄧太后が鄧鸞兄弟とともに和帝の継嗣を定めた後、彼らをそのまま禁中に長期滞在させたことからすると、梁太后は質帝ないし桓帝を擁立した後、おそらく鄧太后の前例に

倣って、梁冀に禁中滞在を許可したとみられる。こうして梁太后は、梁冀が「意思決定」に影響を及ぼすことを可能にし、それによって「輔政」の任を十分に果たさせようとしたのであろう。

ところで、梁冀列伝には、大將軍梁冀と河南尹梁不疑が対立していた時の様子が記されており、それによると、梁冀は中常侍を本官とする宦官を通じて、梁不疑を転任させるよう桓帝に進言している。中常侍は、禁中に宿衛する②の官であるから、おそらくこの時、宦官は禁中において桓帝に口頭で進言したのであろう。当時、②の官は宦官専任の中常侍のみであったため、①・③に任官した外戚が禁中に宿衛することは、原則的には不可能であった。ゆえに、梁氏は中常侍を本官とする宦官と連携し、彼らを通じて、「意思決定」に影響を及ぼそうとしたのである。

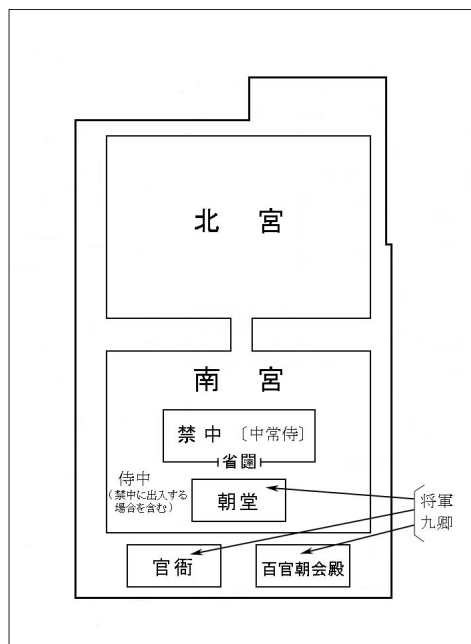
〔Ⅳ〕「改編」以後の外戚政権

右の分析結果に基づいて、「改編」以後の外戚の領袖ならびにその一族の就任官をまとめると、先述の①～③のうち、次の諸官を挙げることができる。

- ①官衙（禁中の外）を主たる執務場所とし、かつ朝堂・百官朝会殿を会議場として使用する官「將軍・九卿」
 - ③通常は官衙（禁中の外）を主たる執務場所とし、皇帝に口頭で進言する場合にのみ禁中に入出した官「侍中」
- 当該期の外戚の領袖は主に①の將軍に、その他の一族は①の九卿

図2 洛陽城の都城と「改編」以後の外戚の就任官（概念図）

〔 〕 ……外戚と連携した宦官の本官



ならびに③の侍中に任官していた。当時の外戚は、③の侍中に任官することによって、臨時的にはあるが、「意思決定」に影響を及ぼすことが可能であった。しかし、彼らは②の中常侍に任官し得なかったため、禁中に宿衛することは、原則的には不可能であった。そこで、外戚は②の中常侍を本官とする宦官と連携し、彼らを通じて、「意思決定」に影響を及ぼそうとしたのである。

以上の事柄を当時の洛陽城の平面図に表すと、図2のようになる。この図は、前掲の図1と同様の手法を用いて作成した概念図であり、それら二つの図を比較すると、外戚の執務場所に一定の変化が生じたことを見て取ることができる。ただし、外戚はその立場を背景に、皇太后から禁中での長期滞在を特別に許されることがあり、その場合には、前述の竇氏と同様に、禁中を中心に国政に関与していたと

みられる。

四 後漢における皇帝支配体制の限界

それでは、後漢の皇帝支配体制が「改編」以後に弱体化した背景には、どのような制度的な問題があったのだろうか。

先に確認したごとく、「改編」以前の侍中・中常侍とともに禁中に宿衛して、皇帝に口頭で進言することを許されていた。輔政者たる外戚は、これらの官に任官することによって、「意思決定」に影響を及ぼすことが可能であった。しかし、後漢の皇帝たちは和帝期頃までに、禁中の外を主たる執務場所とする官（三公・將軍・九卿・尚書台など）に、それまでは禁中宿衛の側近官の管掌していた政策形成と文書伝達を移管し、これによって武帝期以降の側近政治を克服しようとした。和帝期における侍中・中常侍の「改編」は、そのような政治制度の改編の一環として断行されたものであった。⁽²⁴⁾ところが後漢では、「改編」を断行したにも関わらず依然として、侍中には禁中への出入が、中常侍には禁中での宿衛がそれぞれ許可され、さらにそれらはともに皇帝への口頭での進言を許されていたのである。

では、これらの側近官は如何なる背景のもとで、「改編」以後も引き続き設置されたのであろうか。後漢では和帝期頃までに政治制度を大幅に改編した結果、禁中の外を主たる執務場所とする官を中

心に、諸官が政策形成と文書伝達を分掌して、皇帝による統治を輔翼する政治制度が形成された。しかし、三公が政策案を作成した場合には、審議の公正を期するために、その政策案を三公以外の官に審議させることが望ましかった。また、緊急時には、宮城に住まう皇帝が詔を自ら記し、それを宮城の外に宦官を有する諸官（三公・將軍・九卿など）に、尚書台を経由せず迅速に伝達することが求められた。後漢の皇帝たちが禁中の外を主たる執務場所とする官を中心に円滑に統治するためには、これら緊急事態などに対応することの可能な官をあらかじめ用意しておかざるを得なかったのである。それゆえに当時の皇帝たちは、側近官を廃止するのではなく、それらを縮小再編成するに止め、実際に緊急事態が発生した場合などには、側近官に政策形成と文書伝達を臨時的に管掌させて対応を委ねたのであった。⁽²⁵⁾

先述した通り、「改編」以前の侍中・中常侍とともに、禁中での宿衛ならびに皇帝への口頭での進言を許されていた。そこで当時、輔政者たる外戚は、これら侍中・中常侍に任官することにより、口頭での進言を通じて、「意思決定」に影響を及ぼすことが可能であった。それに対して、「改編」以後の外戚は、侍中に任官することによって、臨時的にはあるが、「意思決定」に引き続き影響を及ぼすことが可能であった。さらに、この当時、禁中宿衛と口頭での進言とともに許された唯一の官は、中常侍であった。⁽²⁶⁾そこで外戚は、中常侍を本官とする宦官と連携することにより、彼らを通じて、

「意思決定」に影響を及ぼそうとしたのである。

これとは逆に、宦官の側もまた、外戚との連携を模索していたようである。すなわち、『後漢書』卷六九何進列伝によると、宦官誅滅を企てた何進に対して、中常侍張讓らは次のような言葉を投げかけた。

先帝は嘗て（何）太后と不快にして、幾ど成敗に至る。我が曹、涕泣して救解し、各々家財千萬を出だして禮を爲し、上の意を和悦せしは、但だ卿の門戸に託さんと欲するのみ。

張讓らは、かつて自分たちが先帝こと靈帝に何太后（靈帝の皇后で、何進の妹）の助命を嘆願した理由について、何進を頼みとしていたためと述懐している。このことは、宦官が外戚との連携を模索する様子の一端を示すものといえる。

以上のように、外戚は侍中に、宦官は中常侍に、それぞれ任官するとともに、互いに連携することによって、「改編」以後もなお引き続き「意思決定」に影響を及ぼすことが可能であった。ゆえに、外戚・宦官は和帝期以降に専権を振るうことが可能となり、それにもなつて皇帝支配体制は著しく弱体化したのである。要するに、後漢の皇帝支配体制は、政治制度を大幅に改編したにも関わらず依然として、側近政治を必ずしも十分には克服できなかった点において、大きな限界を有していたのであった。

おわりに

本稿では、後漢の皇帝支配体制が和帝期以降に弱体化した背景について検討した。そこでは、政治制度が大幅に改編された和帝期を起点に、それ以前とそれ以降において、輔政者としての外戚が洛陽城のどこで執務していたのか、という政治空間の問題に特に検討の重点を置いた。その検証結果をまとめれば、以下のようなになる。

和帝期以前の後漢では、侍中・中常侍がともに禁中に宿衛して、皇帝に口頭で進言することを許されていた。そこで、輔政者たる外戚は、これらの官に任官することにより、口頭での進言を通じて、「意思決定」に影響を及ぼすことが可能であった。しかし、後漢の皇帝たちは和帝期頃までに、武帝期以降の側近政治を克服するために、政治制度の大幅な改編を断行した。その一環として、本稿で言うところの「改編」が行われた。この結果、禁中の外を主たる執務場所とする官（三公・將軍・九卿・尚書台など）を中心に、諸官が政策形成と文書伝達を分掌して、皇帝による統治を輔翼する政治制度が形成された。

ただし、皇帝が右のような政治制度のもとで円滑に統治するためには、侍中・中常侍などの側近官を廃止するのではなく、それらを縮小再編成するに止め、緊急事態が発生した場合などには、側近官に政策形成と文書伝達を臨時的に管掌させて対応を委ねざるを得な

かった。そこで、輔政者たる外戚は右の側近官のうち侍中に、宦官は中常侍にそれぞれ任官し、さらに互いに連携することによって、「改編」以後もなお引き続き「意思決定」に影響を及ぼすことが可能であった。和帝期以降における皇帝支配体制の弱体化は、外戚・宦官が「意思決定」に影響力を行使する形で専権を振るい得たために引き起こされたのである。つまり、後漢の皇帝支配体制の限界は、政治制度を大幅に改編したにも関わらず依然として、側近政治を克服できなかった点に求められるのであった。

それでは、本稿で検証した皇帝支配体制の限界は、後漢の皇帝・外戚・宦官・官僚の動向と関連して、具体的にどのような形で表面化してきたのだろうか。また、後漢から禪譲を受けた曹魏（二二〇～二六五）の皇帝たちは、後漢の皇帝支配体制を如何に継承し、それによってどのような支配体制を確立しようとしたのであろうか。これらの問題については、今後さらに検討していきたいと思う。

注

（1） 拙稿A「後漢洛陽城における皇帝・諸官の政治空間」（『史学雑誌』一一九―一二、二〇一〇年）を参照。

（2） 和帝期以降、外戚の専権が甚だしくなったことは、例えば、順帝・桓帝期の大將軍梁冀が「跋扈將軍」と呼ばれるほどの権勢を誇った事例から端的にうかがうことができる。梁冀政権については、拙稿B「梁冀政権の権力構造」（『史滴』二九、二〇〇七年）を参照。

（3） 後漢の宦官の主たる政治活動は人事への介入であった。矢野主税「後漢

宦官の性格について」(同氏『門閥社会成立史』、国書刊行会、一九七六年所収)、拙稿C「後漢時代の三公と皇帝権力―宦官の勢力基盤と徴召の運用を手がかりとして―」(『史観』一五六、二〇〇七年)などを参照。

(4) 前掲拙稿Aを参照。

(5) 本稿では、劉宋・范曄『後漢書』を引用する場合には、『後漢書』以外の正史における巻数の表記方法に準拠して、『統漢書』の志を除いた通算巻数のみを記し、『統漢書』を引用する場合には巻数を省くことにする。その詳しい理由については、前掲拙稿Aを参照されたい。また、本稿では、煩を避けるため、『後漢書』の書名は省略した。

(6) 拙稿D「兩漢代における公府・將軍府―政策形成の制度的変遷を中心に―」(『史滴』二八、二〇〇六年)・E「政策形成と文書伝達―後漢尚書台の機能をめぐって―」(『史観』一五九、二〇〇八年)を参照。

(7) 前掲拙稿A・Dを参照。朝堂と百官朝会殿については、渡辺信一郎『天空の玉座―中国古代帝国の朝政と儀礼』第一章(柏書房、一九九六年)を参照。

(8) このような場合の「國家」が帝室の意であることについては、尾形勇『中国古代の「家」と國家』第五章(岩波書店、一九七九年)を参照。

(9) 大庭脩「前漢の將軍」(『東洋史研究』二六―四、一九六八年。後に同氏『秦漢法制史の研究』、創文社、一九八二年に収録)。

(10) 佐藤直人「前漢後半期における前後左右將軍について」(『名古屋大学東洋史研究報告』二五、二〇〇一年)。

(11) 狩野直禎『後漢政治史の研究』第二章第二節(同朋舎、一九九三年)、東晋次『後漢時代の政治と社会』第一章(名古屋大学出版会、一九九五年)、渡邊義浩『後漢國家の支配と儒教』第二篇第五章(雄山閣、一九九五年)など。

(12) 卷二八馮衍列伝所載の「顯志賦」に「惟天路之同軌兮、或帝王之異政」とある。こゝでの「異政」について、李賢注は、従来の「上天之路」とは異なる「帝王政教」のこととする。それを敷衍すると、前掲宗室四王三侯

列伝の「異政」は、従来とは異なる方針に基づいて行われる政治の意に解される。

(13) 狩野前掲書第三章第一節、東前掲書第一章。

(14) 前掲拙稿Bでは、「録尚書事(尚書の事を録ぶ)」を、尚書台を組織外から監督し、その正常なる運営を図る権限を付与されたことを示す慣用的表現と解した。しかし、筆者は学位請求論文『後漢の皇帝支配体制と政治制度の構造』第二章(二〇一〇年一〇月二〇日、早稲田大学大学院文学研究科より学位授与)において、前稿の解釈を本文で述べた通りに改めた。

(15) 前掲拙稿Eを参照。

(16) 前掲拙稿A・Cを参照。

(17) 前掲拙稿A・Cを参照。

(18) 卷六七党錮列伝に、司隸校尉李膺が小黃門張讓の弟の野王令張朔を逮捕・処刑した後のこととして「自此、諸黃門・常侍皆鞠躬屏氣、休沐不敢復出宮省」とあり、「黃門・常侍」つまり小黃門や中常侍を本官とする宦官は、休暇の際に李膺を恐れて「宮省」から退出しなかったという。楊鴻年『漢魏制度叢考』「宮省制度」・「宮衛制度」・「大夫」(武漢大学出版社、一九八五年)の指摘する通り、通常、宦官が禁中に宿衛していたことを勘案すると、「宮省」とは禁中を指すことになる。

(19) 王仲殊「中国古代都城概説」(『考古』一九八二―五、一九八二年。後に杜金鵬・錢国祥(主編)『漢魏洛陽城遺址研究』、科学出版社、二〇〇七年に収録)。ちなみに、後漢洛陽城の内部の建物・建物群・門の位置関係などについて、詳しくは前掲拙稿Aを参照されたい。

(20) 前掲拙稿Aを参照。

(21) 前掲拙稿Aを参照。

(22) 西嶋定生「漢代における即位儀礼―とくに帝位継承のばあいについて―」(『榎博士還暦記念東洋史論叢編纂委員会(編)『榎博士還暦記念東洋史論叢』、山川出版社、一九七五年。後に同氏『中国古代國家と東アジア世界』、東京大学出版会、一九八三年に改題の上、収録)によると、兩漢代では、

先帝の柩前で継嗣を皇帝位に即けるための策命を奉読した後、新帝に璽授を奉呈した。これより、「定策」とは策命を作成すること、すなわち新帝を定めることとなる。

- (23) 卷六九何進列伝において、宦官誅滅を願い出た何進に対して、何太后が反対意見を述べた言に「中官統領禁省、自古及今、漢家故事、不可廢也」とあるのによると、「禁省」とは「中官」の管領していた場所であった。卷七桓帝紀、永寿二年条の李賢注が「中官、常侍以下」と述べるように、「中官」とは禁中に宿衛する宦官のことであるので、「禁省」は禁中を指すことになる。

- (24) 前掲拙稿Aを参照。

- (25) 前掲拙稿Aを参照。

- (26) 前掲拙稿Aを参照。

